

矢代幸雄

稲賀 繁美著

1920年代前半にヨーロッパに留学、イタリアの画家ボッティチェッリを論じた英文の著書で国際的に注目される。帰国後は帝国美術院附属美術研究所(現・東京文化財研究所)の設立に参画した。次第に東洋美術へと研究範囲を広げ、戦後は奈良の大和文華館の初代館長を務めた。そんな美術史研究の先駆者の生涯に、比較文学・文化の研究者である著者が迫った。日本美術を欧米に紹介した文化外交の側面に光を当てている。

□絵に美術研究所開設のころの矢代の写真が載っていて、そ



文化外交の先駆者の生涯

のネクタイピンをめぐるエピソードが興味深い。周囲で米国への反発が高まったころ、矢代少年は横浜港外に停泊中の米国艦隊旗艦宛てに「友人となつて、誤解を解きたい」という趣旨の手紙を英語でしたためる。そして知り合ったのが、後に将官となるマッカーレー。タイピンは彼から贈られたものだ。「外交の達人」への萌芽がうかがえる。

矢代には晩年に人生を振り返った著書『私の美術遍歴』があり、タイピンのエピソードもそこに登場する。もっとも、「自伝」からの直接の引用はできるだけ減らすというのが本書の方針。それゆえ評伝としては晦渋な部分も見受けられるが、多くの資料や関係者の証言から浮かび上がる矢代の姿も、やはり再評価されるにふさわしい。(ミネルヴァ書房・4950円)